

NEWSLETTER

No. 19

2008年5月14日

会長 山梨正明 事務局 〒600-8268京都市下京区七条通大宮東入大工町125番地の1 龍谷大学
東森 勲 研究室内

TEL 075-343-3311 (代表) FAX 075-343-4302

psj.secretary@gmail.com

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

★ 会員の皆様、お変わりありませんか。日本語用論学会 Newsletter 第 19 号をお届けします。さる 3 月 20 日に、第 36 回運営委員会が開かれました。この号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

★ 会長就任のご挨拶 山梨正明 (京都大学教授)

語用論研究の新たな展開に向けて

日本語用論学会は、昨年 10 周年を記念し国際大会を開催しました。アジアの近隣諸国、欧米をはじめ、250 名を越える多くの参加者を迎えることができ、大会は非常に活発な議論と学問的交流の場になりました。この大会を一つの区切りとして、今年は、次の 10 年に向けての新たなスタートの一年となります。この節目の段階で、あらためて語用論研究のスコープとその新たな展開の可能性を考えてみたいと思います。

語用論の研究分野は多岐に渡ります。「語用論」という用語は、「プラグマティクス」(pragmatics) という用語に対応しますが、この後者の用語はかなり広い意味で使われています。「プラグマティクス」という用語は、「運用論」ないしは「実用論」の意味でも使われます。しかし、この意味での語用論は、言葉に関係する研究というよりも、現実的な場面での行動、具体的な文脈、状況におけるパフォーマンス、等にかかわる研究として広い意味に解釈されます。これに対し、一般に、言語学の分野で「語用論」という用語を使う場合には、形式と意味の対応からなる記号系としての日

常言語と話し手・聞き手、文脈、場面、等の要因との関係にかかわる研究分野を意味します。

ただし、後者の意味での語用論の研究といっても、そのアプローチの仕方は多岐に渡ります。そのなかには、少なくとも次のようなアプローチが考えられます：(i) 発話の遂行機能、適切性条件、間接的発話行為、会話の含意、等の解明に力点をおく研究、(ii) 談話・テキストの展開のメカニズムを特徴づける情報の流れ、結束性・一貫性、等の解明に焦点をおく研究、(iii) 対人関係 (ないしは社会関係) の機能からみたポライトネスの解明を主眼とする研究、(iv) 一次資料としての言語データの記述と分析に基づく対話構造、会話構造の解明を主眼とする研究、(v) エスノメソドロジ的な観点からみた対話・会話分析の研究、(vi) 談話・テキストの背後に存在する言語主体の語りの構造とナラトロジーの研究、(vii) 二言語ないしは複数言語の伝達手段による話し手・聞き手のコード・スイッチングのメカニズムにかかわる研究、(viii) 異なる文化・社会的な背景をもつ伝達者による異文化間コミュニケーションの諸相にかかわる研究、(ix) 形式と意味の関係からなる記号系の使用と解釈の効果の解明を主眼とする修辭的研究、(x) 談話理解、対話理解を可能とする話し手、聞き手の知識構造、情報構造のモデル化に力点をおく研究。もちろん、語用論の研究は、ここに列挙した研究に限られるわけではありません。また、ここに挙げた研究分野が、それぞれ自律的に独立した分野とし

て明確に区分されるわけではありません。これらの分野はオーバーラップし、家族的類似性の関係をつくりながら語用論のダイナミックな研究の流れを形成しています。

語用論学会は、このような研究のダイナミズムを反映する知的交流の場であり、きわめてスコープが広く学問的なポテンシャルの高い学会です。10年の節目を迎えた日本語用論学会が、さらに学際的な知的交流の場（また、暖かい人間的交流の場）として発展していくよう、本学会のために微力ながら貢献できればと願っております。

★ 会長退任のご挨拶 澤田治美（前会長・関西外国語大学教授）

会員の皆様、お変わりなくお過ごしのことと思います。『ニューズレター』の紙面をお借りして、退任のご挨拶を申し上げます。私たちの学会が誕生してから、今年で11年目を迎えます。今を去ること12年前の1996年の初夏、関西外国語大学・教授、小泉保先生を中心として準備会が持たれました。何回かにわたる会合を重ねて規約が整えられて、翌年1997年12月初旬に、第1回の大会が関西外国語大学で開催されました。2008年は学会発足10年目に当たりましたので、「10周年記念世界大会」と銘打って、12月8日-9日、二日間にわたって関西外国語大学で大会を開くことができました。この大会は、ワークショップ、ポスター発表、日本語による研究発表、英語による研究発表、基調講演、シンポジウム、という盛りだくさんのプログラムから成っておりました。読まれた論文の数からしても画期的な大会となりましたが、とりわけ、基調講演者として、海外から Tuen A. van Dijk, Jef Verschueren, Ziran He という超一流の語用論学者をお招きでき、じかに話を聴く機会に恵まれたことは、私たちにとって大きな刺激となりました。私たちの学会が一步一步国際化されつつあることを肌で感じられた方々も多かったことと思います。私自身、小泉会長の後を受けて無事に2年の任期を終えることができたこと、さらには、節目となる10周年記念大会を、第1回大会と同じく、関西外国語大学で開催する

ことができたことに対してとても有り難く思っております。学会を支えていただいた役員の皆様と会員の皆様に心から御礼申し上げます。

語用論は、言語そのものと同時にそれを取り巻く諸要因（発話の場面、発話者の心理、社会、歴史など）に注意・関心を向ける学問であります。すなわち、（静的な）テキスト（もしくは、形式）にとどまらず、（動的な）コンテキスト（もしくは、状況）までも分析対象といたします。語用論という学問のおかげで、「なぜ、そうした発話がなされたのか」、「その発話の背後にはどのようなコンテキストが存在するのか」といった根源的な問題が提起されるようになったことは、言葉の深い理解にとって実に大きな進歩であると言わなければなりません。私たちの学会が今後とも語用論の進化・発展にさらなる貢献をすることを願っております。

末尾ながら、会員の皆様の御健勝をお祈り申し上げ、退任のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました

《 事務局より 》

★ 事務局の移転について

2008年4月より、事務局が桃山学院大学から龍谷大学に変わりました。

新事務局連絡先: 〒600-8268 京都市下京区
七条通大宮東入大工町125番地の1
龍谷大学 東森勲研究室内
Tel 075-343-3311(代表), Fax 075-343-4302
E-mail: psj.secretary@gmail.com

★ 第10回大会総括

参加者(発表者を含む)

一般 172名

学生 85名

合計 257名

★ 平成19年度(2007年度)会計報告

収入	
大会参加費および資料費 (新入会員から徴収の年会費を除く)	788,000
懇親会費 (61名×4,000円)	264,000
昼食代金 (71名×1,000円)	71,000
合計 ①	1,123,000
支出	
講師謝金	680,000
アルバイト代	528,750
謝金(箏曲演奏代金)	20,000
文房具(紙代含む)	67,921
レンタル料(パソコン)	23,244
接待費(交通費含む)	37,960
懇親会費・昼食代金	512,000
会議費(弁当代)	180,180
郵送料	13,610
合計 ②	2,063,665
①-②	▼ 940,665

2007年度会費納入状況(2008, 3, 18 現在)

種別	振込み	大会当日	合計
一般 (5,000)	299	28	327
学生 (4,000)	86	24	110
団体 (6,000)	12	0	12
合計	397	52	449

*なお、昨年同期の納入状況は 371 口でした。

★ 会費納入のお願い

今年度の会費をまだ納入されていない方は、事務局から送られた振込用紙で至急納入をお願いします。

★ 入退会希望、住所などの変更についてこれらについては事務局の上記連絡先にお知らせください。

★ 第11回大会発表募集のお知らせ

2008年度の第11回大会は、以下のとおり開催されます。

■2008年12月20日(土)～21日(日)

■松山大学

(<http://www.matsuyama-u.ac.jp/>)

〒790-8578 愛媛県松山市文京町4-2

つきましては、「研究発表」、「ワークショップ」、「ポスター発表」の発表者を募集します。発表のあとには道後温泉のくつろぎの時間が、皆さまをお待ちしています。会員の皆さま、ふるってご応募下さい。

以下に応募要領を示します。なお、応募宛先、およびワークショップ発表の形態が、昨年度から変更されましたので、ご注意ください。

★ 応募締切

2008年8月20日(水) 必着

★応募宛先・問合せ先

山口治彦(大会運営副委員長)

メール: yamaguchi@inst.kobe-cufs.ac.jp

郵送: 神戸市外国語大学

651-2187 神戸市西区学園東町9-1

078-794-8111

(応募・問合せは、極力、メールでお願いします)

★ 発表形態

①研究発表: 発表25分+質疑応答10分

②ワークショップ: 1時間40分、一定のトピックについて3名以上の団体(司会者を含む)で応募。＜ワークショップは団体発表のみに変更になりました＞

③ポスター発表: 1時間40分(掲示時間)

★ 発表言語

日本語もしくは英語。応募書類に必ず明記してください。

★ 応募原稿の体裁

1ページにつき25文字x 30行で、参考文献は文字数に含めません。

研究発表: 3ページ以内

ワークショップ: 全体説明2ページ以内、各発表1ページ以内

ポスター発表: 1ページ以内

★ 電子メールでの応募について

以下のとおり形式を統一します:

(ア) メール の 件名 では、「研究発表」、

「ワークショップ発表」, 「ポスター発表」の別を明記する。例: 【語用論学会: 研究発表 (山口)】。

(イ) 応募原稿は, Microsoft Wordで作成し, 添付ファイルにて送る。

(ウ) 応募原稿は, ①「個人情報ファイル」と②「発表要旨ファイル」の二つのファイルからなる。

(エ) ①のファイル名を「個人情報(X).doc」, ②のファイル名を「研究/ワークショップ/ポスター発表要旨(X).doc」とする。Xの部分には(代表)応募者の姓を入れる。例: 「個人情報(山口).doc」「ワークショップ発表要旨(山口).doc」

(オ) 一つの応募メールにこの二つのファイルを添付する。

(カ) ワークショップの応募については, 代表者が発表者の個人情報および発表要旨をそれぞれ一つのファイルに取りまとめる。

(キ) メール本文には, 添付ファイル①「個人情報ファイル」の内容と同じ個人情報を貼り付ける。

(ク) ①「個人情報ファイル」は, 以下の書式とする。

★

★

発表形態: (「研究発表」, 「ワークショップ発表」, 「ポスター発表」のいずれか)

題目: XXXX

発表言語: 日本語/英語の別

氏名: XX XXX (ふりがな)

所属・職名: XX大学XX学部 および教授/准教授/大学院生などの別

住所: 〒xxx-xxxx XXXX.

電話番号: xxx-xxx-xxxx

ファックス番号: xxx-xxx-xxxx

電子メールアドレス: xxxxx@xxxx

★ 通常郵便での応募について

電子メールでの応募の場合と同じ要領で原稿を作成してください(特に, 上記(ウ)

(ク)を参照ください)。したがって, ①「個人情報ファイル」と②「発表要旨ファイル」の2種類の書類を用意していただきます。

電子メールでの応募と特に異なる部分は以下のとおりです:

(ア) 用紙はA4を用いる。

(イ) 発表要旨には氏名を書かない。

(ウ) 封筒の表に, 「研究発表応募」, 「ワークショップ発表応募」もしくは, 「ポスター発表応募」と朱書する。

★ 応募条件

発表応募者は会員に限ります。応募者が会員でない場合, 必ず応募と同時に入会の手続きをしてください。入会方法は, <http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/> を参照。

★ 応募者への通知

応募書類を受理後, (できるだけ) 1週間以内に受理確認のお知らせをメール(もしくは葉書)にて発送します。連絡なき場合は, 問合せ下さい。

選考および研究発表の割り振りは運営委員会が行い, 結果は応募1ヶ月以内に応募者に通知します。

今回も, 第十回大会に引き続き, 日本語での発表に加えて英語の発表も受け付けますので奮ってご応募ください。

★ **Call for Papers for the 11th Annual Conference of Pragmatics Society of Japan.**

- Date: Dec. 20th and 21st 2008
- Place: Matsuyama University, Shikoku, Japan
<http://www.matsuyama-u.ac.jp/english/location/location.htm>
- The deadline for submitting abstracts: August, 20th, 2008
- Notification of the result of selection: by Sep. 20th

We are pleased to announce that the Pragmatics Society of Japan is accepting an application of paper presentation for 11th Annual Conference to be held at Matsuyama University in Shikoku on Dec. 20th and 21st of 2008.

Two Special Lectures will be given by the invited speaker (Prof. Deidre Wilson, University College London, UK) and our new president (Prof. Masa-aki Yamanashi, Kyoto University, Japan)

Submission of Abstract

Abstracts for paper presentation are invited on any aspects of pragmatic analysis from a variety of fields, including historical pragmatics, cognitive pragmatics, interface of pragmatics and other disciplines, interlanguage pragmatics, social pragmatics, comparative or contrastive pragmatics studies. All abstract (which must be in English) must be submitted electrically, as attachment files in MS Word format (and if possible in PDF format) to the following address: yamaguch@inst.kobe-cufs.ac.jp.

The guidelines for abstract submission:

1. Authors should not include their names or otherwise reveal their identity anywhere in the abstract title.
2. The length of an abstract should be approximately 500 words, not including references, figures, and/or graphs. The maximum length of the abstract is two pages.
3. The (principal) author's full name must be used as a filename.
4. The body of the e-mail message must contain the following information:
 - a. title of a paper
 - b. name(s) of author(s)
 - c. affiliation(s) of author(s)
 - d. e-mail address(es) of author(s)
 - e. postal address of the (principal) author

f. type of paper presentation: lecture, or poster, or workshop (accepted only for a group application with three or four presentations)

5. The header(subject) of the e-mail should be "Abstract Submission for 11th Annual Conference of PSJ".

Contact Person:

Haruhiko YAMAGUCHI
Kobe City University (9-1,
Higashimachi, Gakuen, Nishi-ku,
Kobe-city 651-2187, Hyogo, Japan),
Tel:+81-78-794-8111,
E-mail:
yamaguchi@inst.kobe-cufs.ac.jp

★『語用論研究』第10号投稿募集

投稿規定についてお知らせ

1. 次号(第10号)は、英語による『世界大会記念特集号』となり、一般会員からの応募も、英語原稿に限った特別の募集になります。
2. 投稿の受付の締め切りが、毎年6月20日に変更になりました。

The Style Sheet of English papers for Studies in Pragmatics

1. Manuscripts
 - a. All manuscripts should be submitted on A4 size paper.
 - b. Manuscripts for papers should be no more than 20 pages in length, excluding references and footnotes.
 - c. Type in 12-point font, 32 lines to a page.
 - d. Leave margins of 2.5 cm (1 inch) on the right and left, and 3 cm on the top and bottom.
 - e. For authors whose native language is not English, it is advisable that, prior to submission, manuscripts be

corrected and edited by a qualified native speaker of English.

- f. Authors are responsible for the first proofreading only. Corrections should be limited to typographical errors.
- g. Authors will receive 20 offprints of their articles.
- h. On a separate coversheet, please indicate the title of the paper, author's name, e-mail address, affiliation & position, and postal address. Authors are requested to submit the manuscript file and the coversheet file in both WORD format and PDF format by e-mail or by regular mail.
(If, after submitting a manuscript by e-mail, you do not receive confirmation of receipt of your manuscript within two weeks, please send an e-mail message requesting such confirmation.)
- i. If submitting by regular mail, save the manuscript file and coversheet file on a floppy disk or other storage medium and send by a registered mail.
- j. Address where the manuscripts should be sent:
e-mail:
psj-sip@andrew.ac.jp
(Dr. Takuo Hayashi, chief editor for *Studies in Pragmatics*)
Regular mail:
Dr. Takuo Hayashi
(chief editor for *Studies in Pragmatics*)
Momoyamagakuin University (St. Andrew's University)
1-1, Manabino, Izumi city, Osaka, 594-0004, JAPAN
- k. Submission deadline: Submissions are welcome at any time, but manuscripts for a given year's issue must be received by June 20 of that year. Submissions received after that date will be considered for the following year's issue. Submitted papers are refereed and authors are

notified of the results around the end of September.

2. General Format

Abstracts:

- a. Abstracts should be not more than 8 lines (about 100 words) in length.
- b. The abstract should appear on the first page of the manuscript, after the title, author's name, and author's affiliation. The abstract itself should be preceded and followed by two blank lines and should begin with the word 'Abstract' in the upper left corner. A maximum of 5 keywords should be given below the abstract, preceded by 'Keywords'.

The Main Text of the Paper:

- a. The introductory section or prefatory remarks should be numbered from 1, not 0. Subsection numbers should be followed by a period (e.g., 1.1.).
- b. Examples should be preceded and followed by one blank line. Each new section should be preceded by one blank line.

Notes:

If notes are included, they should be placed at the end, between the main text and the reference list. Notes should be indicated with Arabic numerals (1, 2, 3, 4) without parentheses.

References:

- a. References should be typed at the end of the paper.
- b. Cite only works quoted or referred to.
- c. The titles of books and articles originally written in Japanese should be transcribed in Roman letters and supplemented by English translations in brackets.
- d. The format for references (including order of elements and punctuation) should be consistent with the

following examples:

- Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Hooper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givon ed. *Syntax and Semantics* 12: Discourse and Syntax, 213-241. New York: Academic Press.
- Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61:1, 121-174.
- Koizumi, T. 1990. *Gengai no Gengogaku: Nihongogoron* (Linguistics of Implied Meaning: Japanese Pragmatics) Tokyo: Sanseido.

★ 第10回大会で発表された方へのお知らせ
(原稿の提出方法,原稿提出の締め切り,送付先等についての追加の御知らせ)

(日本語で発表された方用)

第10回『大会発表論文集』(Proceedings)
(第3号)

掲載論文原稿執筆のお願い。

日本語用論学会では、2005年度より、毎年の大会で発表された論文をとりまとめ、大会後に、『大会発表論文集』を発行しています。つきましては、大会の「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」で、発表されました皆様には、以下の要領で原稿を提出していただくこととなりますので、予め、お知らせいたします。

1. 執筆規定

1. 用紙・枚数： A4用紙、横書き。「研究発表」は8ページ以内、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」

は4ページ以内(注：要旨、参考文献を含む)。字数は自由。

2. 書式：

- a. 余白は上下30mm、左右25mmとする。1行文字数、行数、段組などは自由(ただし、文字のサイズは極端に小さくしないこと)。
- b. 原稿の1ページ目には、タイトル、氏名、所属(E-mailアドレスは任意)を記し、そのあと2行開けて要旨、本文を続ける。
- c. 「はじめに」または「序論」の節は0. からではなく、1. から始めること。
- d. 例文の前後は1行、各節の前は1行開ける。
- e. 注を付ける場合は、巻末とし、本文と参考文献の間にまとめて入れる。
- f. 参考文献のフォーマットは『語用論研究』の執筆要領に従うこと(本学会のホームページ
<http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/>参照)。

3. 要旨：

- a. 要旨は(日本語での論文も含め)全て英語によるものとし、約100語で書く。
- b. 要旨は<Abstract>とページの左上に記し、原稿の1ページ目には、タイトル・氏名・所属と要旨を記すこと。

4. キーワード

- a. 要旨の下に【キーワード】：或いは【Keywords】：と明記して、日本語の論文は日本語で、英語の論文は英語で、5個以内を添えること。
- b. キーワードと本文との間は2行アケとすること

(1 ページ目のイメージ)

<p>タイトル</p> <p style="text-align: right;">氏名</p> <p style="text-align: right;">所属</p> <p style="text-align: center;"><Abstract></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: 80%;"> <p>.....</p> <p>.....</p> </div> <p>【キーワード】:1, 2, 3,</p> <p style="text-align: center;">本 文</p>
--

①「研究発表」, 「ワークショップ発表」, 「ポスター発表」のいずれであるか。

②発表論文タイトルと発表者名(日本語) 氏名(ふりがな)

③発表論文タイトルの英語訳と発表者名のローマ字表記。

④連絡先: E-mail アドレス

3. 原稿提出の締め切り: 2008年8月20日(時間厳守)

4. 原稿の提出方法: 論文の原稿は、カバーシートと合わせて、電子メールで、ワードによるファイルとPDFによるファイルの両方を添付で送付する。

5. 送付先: snagato@kansai.ac.jp (長友俊一郎)

(『大会発表論文集』編集担当: 余 維・田代直也・長友俊一郎)

2. その他の注意事項

- a. 執筆者は、前年度の大会の「研究発表」, 「ワークショップ発表」, 「ポスター発表」での報告者に限る。
- b. 内容は、大会発表に沿ったものとする(但し、必要な修正を施すこと)。
- c. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
- d. 『プロシーディングズ』に掲載した内容は、さらに発展させて、『語用論研究』に投稿することができる。その場合は、必ず十分な加筆・修正を施すこと。
- e. 別のカバーシート用紙(A4)に次の事項を記入して提出すること:

★ Announcement to Presenters at the 10th Annual Conference

(Additional information on the deadline, method & address of submission)

Request of submitting the manuscripts for the proceeding of the 10th Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan(PSJ)
(VoL.3)

[For participants who presented papers in English]

Since 2005, the Pragmatics Society of Japan has been publishing presentations given at its Annual Conference for publication in a volume of proceedings. The following are instructions for use in preparation of manuscripts by those who have presented their work at the

Conference as lecture presentations, in workshop, or in poster sessions.

Instructions for Preparing Manuscripts

1. Writing requirements

1. Paper and length

All manuscripts should be submitted on A4 size paper. Manuscripts for lecture presentations should be no more than 8 pages in length. Workshop and poster presentation should be no longer than 4 pages. Please note that these length restrictions include the abstract and the reference list. There is no restriction on the number of words or characters per page.

2. Format.

a. Margins: top and bottom, 3 cm; right and left, 2.5 cm. Number of lines per page, number of characters per line, and line spacing are not restricted (however, extremely small characters should not be used).

b. The first page of the manuscript should begin with the title, the author's name, and the author's affiliation (e-mail address optional), followed, after two blank lines, by the abstract and the main text.

c. The introductory section or prefatory remarks should be numbered 1, not 0.

d. Examples should be preceded and followed by one blank line. Each new section should be preceded by one blank line.

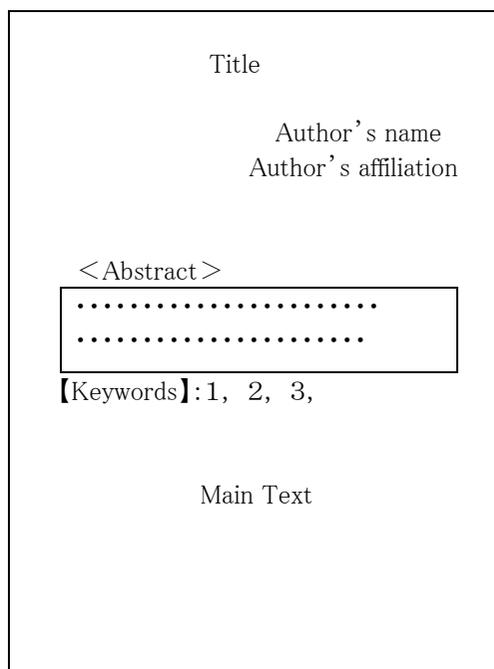
e. If notes are included, they should be placed at the end, between the main text and the reference list.

f. References should follow the style sheet of *Goyoron Kenkyu (Studies in Pragmatics)* (see the homepage of PSJ <http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/>)

3. Abstracts

a. All abstracts should be written in English and should be about 100 words in length.

b. The abstract should appear on the first page of the manuscript, after the title, author's name, and author's affiliation. The abstract should begin with the word 'abstract' in the upper left corner. A maximum of 5 key words should be given below the abstract, preceded by '【Keywords】'. [Refer to the figure below.] Main text should be preceded by two blank lines.



2. Other important points.

a. All contributors must have given a lecture presentation, a workshop presentation, or a poster presentation at PSJ's 10th Annual Conference of the Society.

- b. Aside from necessary corrections, manuscript contents should be faithful to the content of the presentation actually given at the Annual Meeting.
- c. As a general rule, manuscripts should be written in either Japanese or English.
- d. Extended versions of papers which have appeared in the *Proceedings* may be submitted for review to PSJ's Journal *Goyron Kenkyu* (*Studies in Pragmatics*). In that case additions and corrections should be made to the original manuscript.
- e. On a separate (A4) coversheet, please indicate the following information:
- i. Whether your presentation was a lecture, a workshop presentation, or a poster presentation.
 - ii. The title of your paper and your name.
 - iii. Your e-mail address.

3. Deadline of the manuscripts

The manuscripts must be received by August 20th, 2008 (late submission is not accepted).

4. Method of submission

The manuscripts, together with the coversheet, must be sent electronically, as attachment files in both MS Word format and PDF format. Use (the principal author's) name as a filename.

5. Address to which manuscripts should be sent:

snagato@kansai-gaidai.ac.jp (Mr. Yuichiro Nagatomo)

(Editorial committee of the Proceedings: Wei Yu, Naoya Tashiro, Yuichiro Nagatomo)

★ 第3回講演会のお知らせ

第3回「講演会」を下記の要領で開催いたします。講演会の開催は不定期になります。

すが、事業委員会では今後このような機会を増やしていく予定です。今回は、ハワイ大学の Gabriele Kasper 先生をお招きする機会ができました。皆様のご来場をお待ちしております。

記

講師： Prof. & Dr. Gabriele Kasper
(University of Hawaii at Manoa)

司会： 林 宅男

日時：7月19日(土) 15:30~17:00 (受付15:00~)

場所：甲南女子大学9号館911教室

<http://www.konan-wu.ac.jp/camguide/index.html>

<http://www.konan-wu.ac.jp/access/index.html>

演題：“Locating Politeness in Interaction”

概要： Cross-cultural and interlanguage pragmatics have operated largely under the combined frameworks of Searle's speech act theory (1969, 1975, 1976) and Brown and Levinson's (1978/1987) politeness theory. These theories are predicated on a rational actor model of social action, according to which persons determine illocutionary force and politeness on the basis of means-end cost-benefit calculations.

The rationalist model is associated with a conceptualization of pragmatic meaning as the product of speaker intention packaged in the linguistic conventions of a particular language. By contrast, ethnomethodological, poststructuralist, and constructionist perspectives locate politeness in social-discursive practice rather than individual cognition. In this talk, I will examine politeness phenomena in interaction from the vantage point of one such approach, conversation analysis. Based on a variety of interactional materials, I will show how participants orient to politeness through the sequential arrangement of their interaction and

their use of linguistic and other semiotic resources. Politeness is re-specified as an emergent and co-constructed phenomenon that makes visible social members' orientations to normative and moral frameworks in concrete situated activities.

講師プロフィール： Gabriele Kasper is Professor of Second Language Studies at the University of Hawaii at Manoa and currently the North American editor of Applied Linguistics. Her recent books are *Misunderstanding in Social Life* (House, Kasper, & Ross, Longman/Pearson Education, 2003), *Pragmatic Development in a Second Language* (Kasper & Rose, Blackwell, 2002), and *Pragmatics in Language Teaching* (Rose & Kasper, Cambridge University Press, 2001). She is currently interested in applying conversation analysis to the study of second language interaction and learning and in discursive approaches to qualitative applied linguistic research.

★ 談話会報告

第6回談話会は、3月20日、桃山学院大学中ノ島サテライト・キャンパスにおいて、司会・高原脩、講師・中村芳久（演題：“Explaining generalizations” in a unified way）により行われ、活発な議論が展開された。内容は以下の通り。

語用論的にも捉えられる現象を、徹底して認知的に捉えることによって、言語現象を支える本質がどこにあるかを厳密に探ろうとするもので、中心論点は2点。一つは、語用論的要素ともみなされる視点と人称代名詞「私」の問題。「私」が言語化される際には、観られる私と観る私が分裂していて、主体・客体の対立的認知構図が成立している。認知文法の「私」の認知構造図にはこの対立的構図が導入されていないが（ただし Langacker 2008:470 では導入されている）、これを導入するとすべて主体・客体の対立的構図とそのバリエーションで済ませられる

ことになる。中村(2003)のIモードとDモードはそれぞれ、主体・客体の「非」対立的構図と対立的構図であり、こちらの方が言語現象をより柔軟にとらえられ、日英語比較にも有効かもしれない。

もう一つの論点は、Goldberg(2006)のPart IIIで分析されている、(i)島の制約を超えた移動現象、(ii)主語助動詞倒置現象、(iii)項の省略現象、(これらも語用論的に分析できる)に対して、先のDモードからややIモード寄りの、より主観性の高い現象として、統一的に分析してみることである。(iii)に関しては、日本語のような項の省略現象は、項が認知的な参照点であるためであり、省略が自由でない英語のような言語の省略はLangackerのdefocusingの概念が有効だろう。(ii)に関しては、疑問文から比較節(He was faster at it than was she.)まで8種類があげられるが、疑問文の倒置は、状況内視点を反映する一般的な倒置現象との連続性から、場面性の反映として、比較節の倒置などは「依存性」の反映として見ることができる。主語助動詞倒置には主観性の段階性が見られる。(i)について、島の制約を越えての移動には、移動要素の意味とその移動要素を含む全体的意味との間には参照点・ターゲット関係が認められる。一般に(i)(ii)(iii)のような現象について、規範的な構造・構文から逸脱する構造・構文は、主観性の強い(より直截的な)認知を反映している(あるいは主観性の強い解釈が保証されている場合である)、と言ってよいだろう。生物進化を直接モデルとすることのできない言語進化の議論にしても、語用論的要因と認知的要因をしっかりと区別して進めたほうが、実りあるように思われる。

☆☆☆☆☆☆

★ 編集後記

今回のニューズレターは英文の案内のページが増えました。それぞれのstyle-sheetのスタイルを語用論的に比べてみるのも面白いかもしれません。案内をどのように統一していくか、今後の課題だと思われます。スペースの関係で埋め草に苦慮し、編集後記もちよつと長めです。

今年の学会は松山大学で開催されますが、松山は多くの人々が好む町、訪ってみたいと思う町だそうです。司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』を思い出す人も少なくないかもしれません。この小説は、ご存知の通り、松山出身の二人のアンサンブ・ヒーロー（*unsung hero*）、秋山好古・真之兄弟の成長と知性、そしてこのようなヒーローに支えられて成長する時代の物語と見ることができます。弟の真之が、無敵のロシア・バルチック艦隊をどう迎え撃つか、兄の好古が、ロシアの大地でコサック騎兵とどう互角以上にわたりあうか。状況を的確に分析し、相手の心理を読み、持てるものを総動員してどう戦略を組み立てていったのか。真之と好古の知性のスタイルが対照的なだけに、不可能を可能にしていく人間知性の強靱さ・豊かさ・柔軟さを実感できる壮大な読み物でした。考えてみますと、レヴェルは違いますが、私たちの日常の会話ややり取りも、部分的には、このような知性や戦略で実践されているのかもしれません。

文科省の外国語教育の指導要領も「正確さ」より「さまざまな状況で適切に反応できる能力の育成」をすすめているようですが、このような能力を高めれば、大手企業の入社試験の「富士山を動かすにはどうしますか」とか「世界6大陸のうち1つをなくすとしたらどれですか」など（NHK「クローズアップ現代」4月3日放送）、一見荒唐無稽と思われる問いにも落ち着いて対処でき、企業を救い日本を救う人材の育成に繋がるかもしれません。

とりあえず今年の学会の後は、道後温泉の湯につかり、大街道周辺を飲み歩いて、語用論的能力の向こうにあるアンサンブ・ヒーローたちの知性に思いを馳せてみたいものです。（小説中、昭和の軍部首脳の知性崩壊への言及も、よそ事ならず印象的。）

（ニューズレター編集 中村芳久 記）